【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】（中学校用）

都道府県名	岩　手　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	一関市立一関中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	３	３	１	１０	２４
生徒数	９８	１０５	９９	１	３０３	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

生徒一人一人の「確かな学力」を育む指導
　～生徒の実態に応じたきめ細かな指導を通して～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・　全学年・全教科
　→個に応じた指導・学力向上は全教科において必要であるため
・　少人数指導実施学年
　＜数学科＞第２・３学年(全時間)・・・ＴＴ指導と少人数指導の組み合わせ
　＜英語科＞第１学年(週１時間)・・・・ＴＴ指導
　　第２・３学年(全時間)・・・ＴＴ指導と少人数指導の組み合わせ
　　単元・教材により習熟度別指導
　　→　生徒の理解度・定着度に差が出やすいため。

(2)　年次ごとの計画

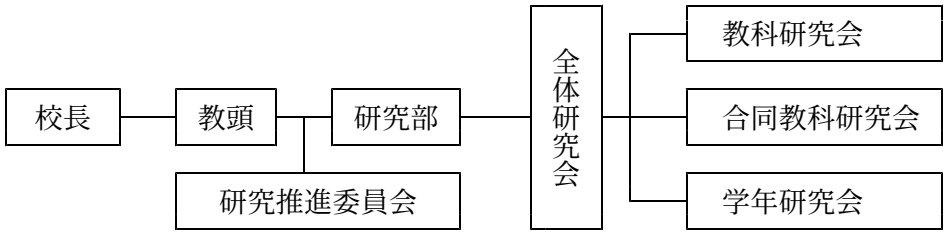
平成15年度	○　テーマ 生徒一人一人の「確かな学力」を育む指導 ～生徒の実態に応じたきめ細かな指導を通して～ ○　研究の見通し(仮説) 生徒一人一人の実態(理解や習熟の程度など）を明らかにした上で、学習への課題意識を高め、個に応じた学習指導方法を工夫すれば、基礎・基本が身に付き、「確かな学力」を育むことができるであろう。 ○　研究の内容・方法 ①　基礎・基本の定着を図る指導法の工夫 ア　合同教科研究部会(国語・社会・理科グループ、数学・英語グループ音楽・美術・保体・技家グループ）における授業研究を積み重ねる。 イ　発展的な学習や補充的な学習等、個に応じた指導のための教材開発をする。 ②　理解や習熟の程度に応じたきめ細かな指導(少人数指導）の方法と指導体制の在り方についての研究の推進 ③　生徒会活動を巻き込んだ学力向上運動の展開 ＜例＞学習委員会・・・学習コンクール・家庭学習向上運動 生活委員会・・・チャイム着席点検・生活向上運動 管理委員会・・・学習環境向上運動 ④　評価の工夫・改善 ア　観点別評価規準表を活用した指導と評価を工夫する。 イ　ＣＲＴ・ＮＲＴ検査の個人カードを作成し、指導に活用する。

	○　テーマ 生徒一人一人の「確かな学力」を育む指導 ～生徒の実態に応じたきめ細かな指導を通して～ ○　研究の見通し(仮説)

平成16年度	生徒一人一人の実態(理解や習熟の程度など）を明らかにした上で、学習の課題意識を高め、個に応じた学習指導方法を工夫すれば、基礎・基本が身に付き、「確かな学力」を育むことができるであろう。 ○　研究の内容・方法 平成１５年度の研究を継続し、深めていく予定であるが、次の項目について新たに取り組む。 ①　学習環境の整備 少人数教室・廊下掲示・各教室の整備など。 ②　ＴＴ指導・少人数指導の枠の拡大 英語・数学に加え、理科・体育にも取り入れる。

(3)　研究推進体制

＊　研究組織



＊　研究推進委員会
校長・教頭・教務主任・生徒指導主事・研究主任・学年主任・外部委員・その他必要に応じた係り担当

＊　合同教科研究会
Ａ・・・国語・社会・理科グループ
Ｂ・・・数学・英語グループ
Ｃ・・・音楽・美術・保体・技家グループ

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

①　基礎・基本の定着を図る指導法の工夫について

・　合同教科研究会の充実と授業を見合う体制作りが図られた。

・　授業を交換し合い、交流を図ることで他教科の実践に学ぶ機会が増え、各教科の基礎・基本について、教科を越えて話し合うことができた。

②　個に応じた指導法の工夫について

・　少人数指導や習熟度別指導を全体研究会に位置付け、理論研究や研究授業を通して、その意義や課題について、教師全体のものにすることができた。

・　少人数授業や習熟度別授業に対する意識調査では、８０％の生徒が「集中度が増した」「学習内容が自分に合っている」「発表の機会が増えた」「先生に質問しやすい」と答え、おおむね好意的に受け止められている。

・　計算問題や基本文に繰り返し取り組むことにより、その定着に向上が見られたた。指導者側から見ても、生徒個々の弱点を発見し、その補強を図ることができた。

【２００２－２００３／ＣＲＴ検査結果より】
［数学第２学年］第１・２学年時――少人数指導実施学年

観　点	第１学年（全国）	第２学年（全国）	全国比の推移
数学への関心･意欲･態度	71．1(67．7)	65．0(59．8)	１０５→１０９
数学的な見方や考え方	53．7(47．7)	38．3(38．4)	１１３→１００
数学的な表現･処理	59．6(59．0)	70．4(66．5)	１０６→１０６
数学、図形などについての知識･理解	70．2(67．6)	72．2(68．2)	１０４→１０６

［英語２年］２年時――少人数指導実施学年

観　点	第１学年（全国）	第２学年（全国）	全国比の推移
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	64．7(64．3)	73．1(72．2)	１００→１０１
表現の能力	67．6(66．9)	66．8(64．4)	１０１→１０４
理解の能力	64．7(66．9)	63．3(63．7)	９７→　９９
言語や文化についての知識・理解	64．1(65．9)	56．1(58．5)	９７→　９６

・　数学では、全体的にはすべての観点で全国平均を上回っている。特に、「関心・意欲・態度」「知識・理解」の２領域で、昨年度と比較し伸びが見られた。しかし「数学的な見方・考え方」では、逆に下がった。これは、２年時になり、内容的に複雑で難しくなるので、これまでの積み重ねが不十分であると、解決の道を見付けていくのが困難になるためと考える。そのため、基礎・基本の確認のための補充問題の作成や、「数学的な見方・考え方」を育てる問題に数多く取り組ませることなどの工夫を図っていく必要がある。
・　英語では、昨年度と比較し、全体的に伸びが見られた。特に、「表現」領域で大きく上回っている。これは、表現活動において、一斉指導では、時間を多く割けなかったり、個々の指導が行き届かない場合があったが、少人数指導やＴＴ指導、習熟度別指導で表現活動の場が多く設定でき、個々の指導ができたことにものと考える。

③　生徒会活動を巻き込んだ学力向上運動の展開について

・　家庭学習向上運動や学習コンクールなどの活動を通して、主体的な取り組みができた。
・　教師主導ではなく、生徒の主体的な取り組みは、全校生徒の意欲を喚起できた。

④　評価の工夫・改善について

・　ＣＲＴ・ＮＲＴ検査の個人カードを作成し、活用を図れるように配備できた。
・　実態調査をすることにより、生徒の学習に対する意識の一端を把握できた。

２．今後の課題

①　個に応じた指導の在り方や教材の開発の一層の推進を全教師で図っていく。
②　少人数教室や廊下などの掲示を工夫し、学習環境を整備していく。
③　指導に生かす評価の在り方を吟味する。
④　補充・発展学習としての選択学習の指導を充実させる。
⑤　家庭・小学校との連携を図る機会と場を意図的・計画的に設定する。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組

①　定期テスト（１・２学期中間テスト、１・２・３学期期末テスト）
②　定期的な学力調査
　・　ＮＲＴ・・・４月(国語・数学・英語)
　・　ＣＲＴ・・・１２月(国語・社会・数学・理科・英語)
③　学習定着度状況調査・・・１０月(国語・社会・数学・理科・英語)
④　単元毎の事前・事後テスト

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

①　学力向上フロンティアスクール研究推進会議での報告
　　(外部委員・ＰＴＡ代表も参加)
②　地区・学区内小学校への授業公開
③　平成１５年度一関市教育研究所発表大会での発表
④　学校・研究部・学年・学級通信での取り組み経過・結果報告
⑤　ＰＴＡ総会・授業参観・地区懇談会での保護者への啓蒙活動

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■１５年度からの新規校　□１４年度からの継続校

【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
□７～９学級　■１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上

【指導体制】　■少人数指導　■Ｔ．Ｔによる指導
□その他

【研究教科】　■国語　■社会　■数学　■理科
■外国語　■音楽　■美術　■技術・家庭
■保健体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■有　□無